

県畜産環境コンクール表彰式を実施 ～畜産関係団体等情報交換会で～



消費地での畜産継続に不可欠な、環境・衛生対策や資源循環等への取り組みを表彰した

1月29日に海老名市内のホテルを会場に開催された畜産関係団体による情報交換会で、「平成27年度神奈川県畜産環境コンクール」（主催：神奈川県畜産経営環境保全総合対策指導協議会、後援：（一社）神奈川県畜産振興会）の表彰式が行われた。同コンクールは、神奈川県で畜産業を継続するために不可欠な畜舎や周辺施設の環境・衛生対策の優良事例を表彰し、畜産関係者の意識向上と県民の県内畜産業への理解を促進しようというもので、今回が3回目となる。審査項目は「畜舎周辺の環境美化」「畜舎等の衛生対策」「資源循環の実施状況」「特色のある取り組み」の4つ。エントリーした県内105戸の畜産農家の中から、地域協議会による審査を経た20戸が推薦され、外部審査員2名を含む計10名で構成する県審査会で、乳牛、肉牛、養豚、養鶏の4部門別に各受賞者を決定した。

各部門の最高得点農家の中から選ばれる最優秀賞には、3年連続で乳牛部門の有限会社石田牧場（伊勢原市）が選ばれた。優秀賞は、肉牛の部・「有限会社原牧場」（伊勢原市）、養豚の部・「株式会社みやじ豚」（藤沢市）、養鶏の部・「織茂養鶏場」（横浜市）が受賞した。

（有）石田牧場の代表を務める石田陽一氏は、「酪農業は消費者の顔が見えにくく、環境に対する取り組みを紹介する機会も少ないが、畜産農家は人の口に入る食品を生産していること、消費者の健康な食生活や笑顔に貢献している事を常に意識したい。消費者の近くで牛を飼っているからこそ、子ども達が県の畜産業に良いイメージを持てるよう、今後も皆さんと一緒に環境整備に取り組みたい」と挨拶した。

神奈川県畜産振興会の志澤勝会長は、「環境対策は畜産農家自らが意識して取り組むべき課題であり、特に都市農業である神奈川では、消費者の理解を得られるような目に見える形での努力も必要だ。こうしたコンクールを通して、畜種を超えた交流や情報交換を行い、若い世代からの将来を見据えた神奈川県畜産業への提案が出る事を期待する」と話した。

情報交換会には畜産関係団体や行政関係機関の関係者ら約90名が参集し、県環境農政局畜産課が「かながわ畜産ブランド推進協議会」の活動状況を紹介したほか、前農林水産省畜産部長で一般社団法人畜産環境整備機構理事・原田英男氏が「国際化の進展を見据えた地域の畜産振興」について講演した。